資 料

臨床実習において対象理解の手がかりとなる 学生の体験についての抽出

山 崎 あけみ*

Helping Midwifery Students to Understand Their Patients: An Overview

Akemi Yamazaki

Special Division of the Science of Midwifery College of Medical Technology,
Kyoto University

Abstract

The purpose of the present study is to explain how midwifery students view the entire cycle of women in pregnancy. By focusing on the students' viewpoints and analyzing their experiences, the results could have practical application. Data was gathered from semi-structured interviews with 16 midwifery students and analyzed using the qualitative descriptive method. Midwifery students were categorized into 3 groups according to the way in which they responded to their patients: 1) those interested in the maternal self-image, 2) those focusing on the balance between the two aspects of mother and woman, and 3) those who develop understanding by focusing on the relationships the expectant mother has with others in her life.

The experiences which helped the students to understand their patients in more depth were twofold: Their involvement as a care worker in the process of the patient's changing self-image, and secondly, the experience of observing the relationship between the patients and others in their lives. The study supported the notion that both these experiences serve as valuable input in the midwifery students coming to know their patients within a holistic framework.

要 旨

この研究の目的は、助産婦学生が妊娠期の女性をどのように理解しているか記述し、それをもとにして、臨床実習において対象理解の手がかりとなる学生の体験を抽出することである。データ収集は、16人の助産婦学生に対して半構成面接により実施し、分析は、質的因子探索型の手法をとった。

助産婦学生による妊娠期の女性に対する対象理解は、①「母親としての自己」を中心に展開している対象理解、②「2つの自己のバランス」を中心に展開している対象理解、③「生活周辺の他者との相互関係」を中心に展開している対象理解、の3つのタイプに

* 京都大学医療技術短期大学部

分類された、学生の対象理解の手がかりとなる体験は、女性の自己概念の変容のプロセスに、学生がケアの行為者として『巻き込まれ体験』と、学生の観察が、女性の生活周辺の他者との相互関係について『広がり体験』があった。この2つの体験が、助産婦学生にとって、妊娠期の女性を理解する手がかりであるという示唆を得た。

1. はじめに

看護者としての資質は、自分以外の人間に、自分とは違った人格をもつ人としてどれだけ関心が持てるかによるという¹⁾。ところが、自分以外の人間を受容することは、知識として教えても伝わるのではなく、人との関わりの中で体験していく以外には知りようがない²⁾。よって、健康上の課題に取り組んでいる自分以外の人間との臨床の中での関わりは、看護者を育てる上で重要な体験である。

従来より看護学の各領域の臨床実習において、学生が受け持ち事例に個性を持たせて全人的に捉えることの重要性は繰り返し強調されることである。しかし、実際にどのように学生を教育すれば、対象理解につながるのか提示することの難しさも周知のことである。

妊娠期の女性は、身体的・精神社会的に変容の過程であり、女性の人生の中で最大の自己変容の課題に取り組んでいる。助産婦学生は、妊娠期の女性に専門職として関わることができるように教育されるが、彼女達はどのように対象を理解しているのだろうか。また、臨床実習において対象理解の手がかりとなる体験とは、どのようなものであろうか。

2. 関連文献の検討と本研究の枠組み

1) 母親になる女性の自己概念

1950年代からの多くの古典的研究が、人生において親になることは、夫婦および個人にとってひとつの発達課題であり、「危機」であると指摘してきた^{3)~6)}。アメリカでの70~80年代以降の看護学の文献は、母親になる女性や家族を看護者としてどのように援助すべきかに焦点があてられてきた^{7)~10)}。

女性は妊娠中に、胎児の母親としての自己の受容を要求され、そのことは、人生設計や日常

生活の大きな変容を強いられることになる。Ledermanは、この時期の女性の課題は、妊娠する前の自己に戻ることはできないことを認識し、いくらかのアンビバレントな気持ちを持ちながらも、胎児の母親としての自己を受容することであるとしている¹¹⁾。多くの研究者は、自己の変容の過程をスムーズに経過できるか否かが、後の母親役割行動に影響するので、援助する看護者の担う役割の重要性を指摘している。

2) 母親になる女性と生活周辺の他者

母親になる女性は、日常生活では、その課題にひとりで行き届くわけではない。父親になる夫と共に、さらには、家族やコミュニティから支援や影響を受けている。よって、自己の変容に影響する重要な要因として、女性とその生活を取り巻く人々との相互関係が上げられる。

アメリカにおける多くの研究は、この時期の女性にだけ注目し、援助の対象とするのではなく、Family-centered approachを前提としている。わが国でも、新道は、妊産褥婦への助産婦としての全体論的視点からの援助における、「家族中心の援助」の重要性を述べている¹²⁾。大日向は、母性は社会的・文化的要因の規定を受けて成立する側面があるが、固定されたものではなく、各時代固有のものがあつて、世代差があるとしている¹³⁾。つまり、母子を取り巻く家族やコミュニティは、支援となる側面も当然持つが、日々の生活の中で、個々の持つ価値観や役割期待に食い違いが生じて、女性の自己概念に否定的要素を齎す可能性も否めない¹⁴⁾。とするなら、助産婦学生は「胎児の母親としての自己」の受容の過程を援助するために、その女性と生活周辺の他者との相互関係をも考慮できるように訓練される必要があると言える。

3) 助産婦学生を育てる上での対象理解

助産婦を育てる上で、欠かせない、そして大きなウエイトを占めるものは、分娩介助実習である。よって、従来から助産婦学生を対象とした研究は、分娩介助技術の細目について、経験例数に伴う学生の到達度や教師の指導・評価基準に焦点があてられることが多い。これは、助産婦教育の中の臨床実習における到達目標では、技術習得指向が強いことを物語るものである。しかし、横尾が指摘するような、学生を「生む人、生まれる人そして家族中心」を追求しながら助産技術を実践できる人材として育てるためには¹⁵⁾、学生とケアの対象者との間で生じている事象に注目すべきではないだろうか。

本研究では、以上の関連文献の検討から示唆を得て、「母親としての自己」「母親として以外の自己」「生活周辺の他者との相互関係」を研究の枠組みとし、はじめに学生が対象をどのように理解しているか記述することを試みる。それをもとにして、臨床実習において対象理解の手がかりとなる学生の体験を抽出することを目的とする。

3. 研究方法

本研究は、帰納的・質的因子探索型研究である。K大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻の学生で、同意の得られた16名を対象とした。データ収集の時期は、妊娠期から産後1ヵ月健診までを受け持つ継続事例と、学生が外来健診・電話訪問で平均3～4回関わった妊娠末期を選択した。データ収集に先駆けて、研究計画書にそって目的を説明し、実習評価には関係しないこと、研究への参加はいつでも辞退可能なことを確認した。また、研究者は、妊娠期の実習指導には関わっておらず、学生が受け持った事例との面識・情報もなく、インタビューでは、あくまで学生の対象理解を尊重する姿勢を提示した。先の研究の枠組みから作成した半構成面接により、平均50分のインタビューを実施し、謝礼を支払い終了した。面接内容は、同意を得て録音し逐語録を作成した。それらのデータをコード化し、比較分析してカテゴリーを抽出した。文献と抽出されたカテゴリーから論文を作成する過程では、質的研究の実践・指導の経験が豊かな研究者の指導を受けた。

表1 助産婦学生と受け持ち事例の特徴

学生	外来実習	電話訪問	初経別	職業	家族形態	里帰り	面接時点での妊娠週数と産科的リスク
A	2	2	経産婦	無	核家族	しない	33週1日
B	2	1	経産婦	無	核家族	しない	28週3日
C	2	2	初産婦	無	核家族	実母が来る	36週6日 有
D	2	1	初産婦	無	核家族	する	29週6日
E	2	1	初産婦	有	核家族	する	33週6日
F	2	2	経産婦	無	核家族	する	37週4日
G	2	2	経産婦	無	核家族	しない	35週1日
H	2	2	初産婦	無	核大家族	しない	31週3日
I	2	1	経産婦	無	核家族	しない	32週3日 有
J	2	1	初産婦	有	核家族	しない	28週4日
K	2	0	経産婦	有	核家族	しない	32週3日 有
L	3	1	初産婦	有	核家族	実母が来る	36週6日
M	3	2	初産婦	有	核大家族	しない	35週1日
N	2	0	初産婦	有	核家族	しない	28週6日
O	2	1	経産婦	有	核家族	する	28週6日
P	2	0	経産婦	有	核家族	しない	29週6日 有

4. 結 果

1) 助産婦学生と受け持ち事例の特徴

学生は、いずれも看護婦免許は持つが臨床での実務経験のない22～23歳の女子である。受け持ち事例は、初産婦が8名、経産婦が8名であり、うち8名が勤労妊婦であった。また、2名を除く14名の事例は核家族で日常生活を営んでいるが、出産前後に、里帰りする予定者は4名、実母が泊り込んで援助するものは2名であった。入院を伴う産科的リスクのある事例は

4名であった。

2) 学生による3つのタイプの対象理解

カテゴリー抽出の第1段階として、本研究の枠組みから作成された半構成面接から、対象の「母親としての自己」「母親として以外の自己」「生活周辺の他者との相互関係」について、学生がどのように理解しているか記述することを試みた。インタビューの結果、3つのカテゴリーのうち、いずれの学生も「母親としての自己」は理解しようとしていた。一方、「母親として

図1 対象理解の手がかりとなる体験の抽出プロセス

図2 「母親としての自己」を中心に展開している対象理解

以外の自己」「生活周辺の他者との相互関係」は、学生によって全く理解しようとしていなかったり、内容に相違点がみられ、これらの関連から、学生の3つのタイプの対象理解が記述できた。

①「母親としての自己」を中心に展開している対象理解

A～Dの4名の学生が、このタイプに分類できる。経産婦は、日常全般が母親としての生活に忙殺されていること、また、初産婦は、出産・育児に話題が集中していることなどから、学生は対象の「母親としての自己」を理解する。

図2に示すように、このタイプの学生の対象理解の中心は、3つのサブカテゴリーから形成される「母親としての自己」である。さらに、「生活周辺の他者との相互関係」も、「母親としての自己」に影響する人々という観点で理解しており、対象の「母親として以外の自己」に関しては、ほとんど理解しようとしていない。

②「2つの自己のバランス」を中心に展開している対象理解

L～Pの5名の学生はこのタイプに分類できる。フルタイムの仕事を持つ勤労妊婦の多忙な産休にはいるまでの妊娠期をかいま見て、学生

(この人にとって仕事って?) すごい、生きがい。すごい大事。そうしてないと自分じゃないっていうか、家にずっとおるのは自分じゃないみたいない感じ。だから、今回も望んでできたけれどちょっとびっくりした。えー仕事どうしようみたいないや、とかじゃないんですよ。でも、仕事どうしようって。
学生P

図3 「2つの自己バランス」を中心に展開している対象理解

だんなさんがね、わかってくれないうですって。お腹さわったりとかこわいらしくって、あかちゃん生まれてからも「僕はノータッチや、君がんばってくれ」って。「こんなに私しんどい思いしているのにもう」って。なんか、おうちにいるときのことを手取るように話してくれるんです。だから想像できるっていうか、旦那さんとおじいちゃんの面倒をどういう風に見てはるのか。「私がいなかったらどうなるんやろう」って言わはって、旦那さんとおじいちゃんのために生きてはるって印象を受けた。
学生H

図4 「生活周辺の他者との相互関係」を中心に展開している対象理解

は対象にとって大切な「母親として以外の自己」を理解する。フルタイムの仕事をしている自己像は、「母親としての自己」と並んで強烈に表出される自己である。図3に示すように、このタイプの学生を対象理解の中心は、「母親としての自己」と「母親として以外の自己」とのバランスである。臨床実習の関わりでは、2つの自己のバランスをとりながら「母親としての自己」を順調に獲得してゆくことが話題の中心である。

③「生活周辺の他者との相互関係」を中心に展開している対象理解

E～Kの7名の学生はこのタイプに分類できる。このタイプの特性は、対象が「母親としての自己」「母親としての以外の自己」のいずれも、学生に対して強烈には表出しないことである。しかしながら、図4に示すように、このタイプの学生を対象理解は、「母親としての自己」「母親として以外の自己」の両方に影響する「生活周辺の他者との相互関係」について幅広い対象理解を展開する。

3) 対象理解の手がかりとなる学生の体験についての抽出

カテゴリー抽出の第2段階として、3つのタ

イプの対象理解から、対象理解の手がかりとなる学生の体験の抽出を試みた。先のタイプによって体験は異なり、手がかりとなる2つの体験が抽出された。

第一に、その体験を中心にケアの行為者として関係を深めながら、対象の自己に共感しつつ接近する記述が展開されることがある。つまり、学生は、対象の自己への「巻き込まれ体験」を通じて理解している。

「2つの自己のバランス」を中心に展開しているタイプの学生は、「巻き込まれ体験」によってのみ対象を理解し、生活周辺の他者への理解の広がりには乏しいが、2つの自己について最も深く巻き込まれた対象理解を展開している。「巻き込まれ体験」は「母親としての自己」についてのエピソードで主に展開される。現在の日常生活が自分中心から胎児中心のライフスタイルに変わりつつあるか、また、児を迎えるための準備状況について、学生は、対象が妊婦としては望ましくない状況であると判断する。そこで、妊婦として望ましい状況になるように関わる中で、一般的には望ましくなくとも、この対象にとっては「フルタイムの仕事をしている自己」を優先することの重要性に気付く。学生は、対象の2つの自己のバランスをとりながら、妊娠期を順調に経過するために、ケアの行

データ①：「巻き込まれ体験」の抽出

「母親としての自己」： 3) 母親になるための準備状況

#そうですね。まず、準備。今はまだ、お仕事が時期的に忙しいというのがあると思うんですけど、前お伺いしたときに、まだ、あかちゃんとか出産とかの準備をされていないって話をされていて。今の時期から準備始めた方がいいんでってお話しをして。→ 今回お会いしたときもまだされていないって。だから、仕事为主でおかさんの行動はまだ見られない気がします。

学生 N

この対象にとっての
「フルタイムの仕事をしている自己」
の重要性に気付く

ケアの行為者としての「巻き込まれ体験」

#自分のお仕事に誇りとか面白みとかもってらっしゃって、子どもを生んでおかさんだけになってしまう人ではない気がするんですよ。おかさんになっても、いわば、家庭とは違う自分みたいなものも持っていられる方だという気がするんです。だから、私が初めに感じたことはこの人は忙しい人ですし、妊娠している人にとっては好ましいことではないかもしれませんが、やっぱり、お仕事しながら健康な正常な妊娠経過を辿らせてあげたら、それがベストだと思うんで、仕事を続けられるってことを念頭においた指導しか考えられない。結構自分もそういう考え方なんで、そう思うのかもしれないですけど。

学生 N

為者として巻き込まれた相互作用の上に対象理解を展開している。

第二に、対象の生活周辺の他者との相互関係についての体験を展開する時の学生は、生活を取り巻く他者との関係を広範囲で表装的に展開する。つまり、学生は、対象の生活を取り巻く人々との関係を観察する「広がり体験」を通じて理解している。

「生活周辺の他者との相互関係」を中心に展

開しているタイプの学生は、「広がり体験」によってのみ対象を理解し、自己への深まりは乏しいが、生活周辺の他者に広がって対象理解を展開している。「広がり体験」は「母親としての自己」ばかりでなく、「母親として以外の自己」に影響する人々との相互関係にも関心を示し、個々のユニークなエピソードが表出される。例えば、妻としての自己をほとんど表出しない経産婦に対しては「妻としての自己が見当た

データ②：「広がり体験」の抽出

データ③：「巻き込まれ体験」「広がり体験」の抽出

↓

ケアの行為者としての「巻き込まれ体験」・生活周辺の他者との相互関係への「広がり体験」

#今日ちょっと、嫌われたかもって心配しているんです。なんか、食事指導のとき、そんなに私時間が経っているって気がつかなくて。すごい時間とったのに、具体的じゃなかったし、自分もそう思ったから、聞いている患者さんもそうだと思うし。でも、食生活が見えてきたというか。家にいるから、さっさとすませてしまし、子どもと一緒におやつとか。お父さんがどうしても甘いものや辛いもの好きだから、食べてしまう。（ご主人のことは見えてきた？）仲のいいご夫婦。でも食生活が乱れる原因。どうしても奥さんも、旦那さんの好きなものにあわせて料理作ってしまうんですね。だから、次回は心に届いてちゃんと実行できるような、同じことばっか言わない食事指導と思ってるんですけど。 学生 C

ないこと」に関心をもつ。また、対象の話題の中の実母は、育児の支援者としてのみ捉えられているが、外来健診に付き添ってきた実母に出会った学生は、娘としてリラックスして甘えられる関係を見出す。さらに、経産婦が、パートタイムの仕事仲間との関係を大切にすることから、学生は、母親として以外の自己をもち、バランスをとっていると理解する。しかしながら、「広がり体験」では、学生は、生活周辺の他者との相互関係を鮮明に表出しているが、あくまで観察者である。妊娠期の段階では、他のタイプの学生のようなケアを提供する行為者として、対象の自己に巻き込まれた相互作用の上での対象理解が中心ではない。

「母親としての自己」を中心に展開しているタイプの学生は、「巻き込まれ体験」と「広がり体験」の両方により、対象を理解している。これらの2つの体験は、「母親としての自己」についてのエピソードの中で展開される。例えば、学生は、妊娠経過を順調に過ごすためのカロリー・塩分制限の食事指導を行う中で、指導内容が受け入れられていないことに気づき、初めて取り巻く家族と生活している対象を理解する機会を得る。このような保健指導を行う過程で、学生は、対象にどのように関わったことが失敗だったか、今後どうしたいかというケアの行為者として巻き込まれた相互作用と、観察した対象の生活周辺の他者への広がりの上に対象理解を展開している。

5. 考 察

1) 対象理解の手がかりとなる体験

助産婦学生はできるかぎり有効なケアを提供するために「その対象を知ろう」としている。Mayeroffは、70年代にケアリングの概念を最初に包括的に取り上げ、その主な要素の中で「相手を知ること」の重要性を上げている¹⁶⁾。つまり、ケアの提供者は相手のニーズと反応を正確に知ることができなければケアリング的な対応はできないと指摘している。本研究の助産婦学生は、外来健診や電話訪問における対象との関わりの中で展開する2つの体験から、対象理解の手がかりを得ていた。

①「巻き込まれ体験」の意味するもの

Jenksは、有効にケアリングをするためには、学生にinterpersonal relationshipの成立を促すことが重要であると述べている¹⁷⁾。「対象を知ること」は、「対象の情報を得ること」とは大きく違い、かつ、ひとつひとつの情報の合計したものが単純にその対象の全体像ではないと言う。つまり、学生の臨床実習において対象理解を深めるために必要なものは、「巻き込まれ体験」であり、Holdenが効果的なケアリングのために不可欠な要素としているemotional knowingの感覚、二者の目標達成のための適切な関係性の中で心地よい感覚であれ、不快な感覚であれ相互に感情を揺れ動かす出来事であると言える¹⁸⁾。

妊娠期の女性の自我は、家族・コミュニティー・医療従事者などの他者と相互作用を持ちながらダイナミックに変容する途上にある。つまりその対象をより深く理解するためには、このような女性の母親としての自我を形成する途上で、相互作用を持つ他者の一人として、助産婦学生自身が巻き込まれる体験が必要である。本研究より、学生はこの動的なプロセスに巻き込まれることにより、豊かな対象理解に繋げることができると考えられる。

本研究において、どの学生の対象理解からも表出された「母親としての自己」は、妊娠期の女性の健康の目標と助産婦学生の教育目的の両方における中心的な課題である。さらに、この時期の女性を理解する重要な側面として従来から指摘されている事象が、サブカテゴリーとして抽出された^{19)~21)}。このように、「母親としての自己」の獲得は、学生と対象の双方にとって切実な到達課題なので、心身ともに順調に母親になるためにケアしようとしている学生の様子が、どのインタビューの中からも表出されている。中でも、2つの自己のバランスを取りながら、順調に「母親としての自己」を獲得できるようなケアを試みた学生の巻き込まれ体験からは、最も深まりのある対象理解が表出された。これらの結果より、助産婦学生にとって対象理解の手がかりとして、女性の「母親としての自己」と相互作用を持つケアの行為者のひとりに

なることが考えられる。

②「広がり体験」の意味するもの

「生活周辺の他者との相互関係」を中心に展開している学生達は、対象からいずれの自己も強烈には表出されなかった。しかし、自己の表出は、その時点での双方の関係性や個人のスタイルによりかなりの違いがある。自己を看護者に表出する程度が極めて少ない人もいれば、時間が必要な場合もあるわけである。人は、自分に関する情報のすべてを人に分かち与えることはさしひかえ、安全かつ適切と判断する範囲内で表出するという²²⁾。とするなら、助産婦学生が妊娠期の女性に関わる時も、「巻き込まれ体験」だけが、対象にとって常に心地よいケアの保証になり、また、学生の成長を促すとは限らないと言える。

自己概念の発達や変容には、重要他者のまなざしに自分がどのように映っているかが重大な問題である²³⁾。学生は、多くの先行研究の提示する、母親になる女性の生活を取り巻く他者の存在を、観察することにより理解しようとしていた。これらのことから、本研究から抽出された「広がり体験」は、学生に対象理解を促すもう一つの有効な手がかりであると言える。

さらにWatsonは、ケアリングとは、二者間における人間性の共有レベルに関する相互交換であるとしているが、決してケアする者の視点がケアの対象者にだけ局限していてよいということではない。つまり、ケアするための対象理解というプロセスには、その対象を取り巻く環境・人間との関わりあいについても関心が向けられなければならない²⁴⁾。本研究においても、「母親としての自己」を中心に展開している学生は、食事指導において思わしくないフィードバックを受けた後、夫・上の子などとの日常の関わりも含んだ対象の食生活を発見している。このように、学生が生活周辺の他者との関わりを通じて対象理解しようとした時、初めて看護者として有効なケアを提供できるであろう。

2) 学生の臨床実習への提言

本研究での結果から、臨床実習において対象

理解の手がかりとなる体験として「巻き込まれ体験」と「広がり体験」が抽出された。いずれも、外来実習や電話訪問におけるそれぞれの学生と事例の間で成立している個別的な相互関係である。Montgomeryは、ケアリングは相手と共に展開し、相手との関係によってしか理解されないと指摘している²⁵⁾。さらにその関係の在り方は、それぞれの関わった人の個性によって違ってくるという。つまり、本研究の16の助産婦学生が受け持った女性に対して描いた対象理解は、その時点の双方の関係の上に成り立っている流動的な現象であると言える。

これらのことより、臨床実習における学生の対象理解とは、あてはまるような全体像が最初にあるわけではなく、完成した不動の全体像を目指すことが目標でもない。本研究の結果から、教育者は、学生と対象の間で起こっている事象に忠実になり、ケアの行為者としての「巻き込まれ体験」や、生活周辺の他者との相互関係を観察する「広がり体験」を提供することが、学生にとって対象理解の手がかりとなるという示唆を得た。

6. 本研究の限界と今後の課題

本研究には、以下の限界と課題がある。インタビューによるデータの収集と分析のプロセスは、研究者自身が測定道具となっていることによる歪みは否めない。また、学生の受け持ち事例との関係の中で生じている事象であるが、今回は学生サイドからのデータのみであり、今後は受け持ち事例へのインタビュー・参加観察などからもデータ収集し、信頼性・妥当性を深めるべきである。さらに、看護の基礎教育を終了し、助産学特別専攻での臨床実習における助産婦学生から得た結果が、他の専門領域の臨床実習に一般化するには限界がある。

7. 結 論

本研究では、「母親としての自己を中心に展開している対象理解」「2つの自己のバランスを中心に展開している対象理解」「生活周辺の他者との相互関係を中心に展開している対象理解」という3つのタイプの対象理解が記述でき

た.

臨床実習において対象理解の手がかりとなる学生の体験は、ケアの行為者として対象と相互作用をもつ「巻き込まれ体験」と、対象の生活周辺の他者との相互関係を観察する「広がり体験」が抽出された。

謝辞

忙しい実習中に、対象を理解することについて教えてくださった学生の方々と、長期にわたり貴重なアドバイスを頂きました高知女子大学看護学部教授・野嶋佐由美先生に感謝いたします。

この論文は、平成8年度文部省科学研究費(奨励A No08772207)の助成により行った研究の一部です。

引用文献

- 1) 見藤隆子: 人を育てる看護教育, 11-22, 医学書院, 1987.
- 2) 高橋照子: 人間科学としての看護学序説 看護への現象学的アプローチ, 79-90, 医学書院, 1990.
- 3) Dyer, E. D. : Parenthood as crisis: A restudy, *Marriage and Family Living*, **25**, 196-201, 1963.
- 4) Hobbs, D. F. Jr. : Parenthood as crisis: A third study, *Journal of Marriage and the Family*, **27**, 367-372, 1965.
- 5) LeMasters, E. E. : Parenthood as crisis, *Marriage and Family Living*, **19**, 352-355, 1957.
- 6) Rossi, A. S. : Transition to parenthood, *Journal of Marriage and the Family*, **30**, 26-39, 1968.
- 7) Briggs, E. : Transition to parenthood, *Maternal Child Nursing Journal*, **8**, 69-83, 1979.
- 8) Curry, M. A. : Maternal attachment behavior and the mother's self-concept: The effect of early skin-to skin contact, *Nursing Research*, **31**(2), 73-78, 1982.
- 9) Hrobosky, D. W. : Transition to parenthood: A balancing of needs, *Nursing Clinics of North America*, **12**(3), 457-468, 1977.
- 10) Mercer, T. R. : First-time Motherhood: Experiences from Teens to Forties, New York: Springer, 1986.
- 11) Lederman, R. : Psychosocial Adaptation in Pregnancy : Assessment of Seven Dimensions of Maternal Development, New York: Prentice-Hall, 1984.
- 12) 新道幸恵・和田サヨ子: 母性の心理社会的側面と看護ケア, 146-152, 医学書院, 1990.
- 13) 大日向雅美: 母性の研究, 62-66, 川島書店, 1988.
- 14) 山崎あけみ: 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念, *日本看護科学会雑誌*, **17**(4), 1-10, 1997.
- 15) 横尾京子: 助産学臨床実習論, *助産婦雑誌*, **46**(6), 448-453, 1992.
- 16) Mayeroff, M.: On Caring, 1971, 田村真・向野宣之訳, ケアの本質 生きることの意味, 34-35, ゆみる出版, 1987.
- 17) Jenks, J. M. : The pattern of personal knowing in nurse clinical decision making, *Journal of Nursing Education*, **32**(9), 399-405, 1993.
- 18) Holden, R.J. : Empathy: The art of emotional knowing in holistic nursing care, *Holistic Nursing Practice*, **5**(1), 70-79, 1990.
- 19) Colman, L. L. & Colman, A. D.: Pregnancy :The Psychological Experience, New York : The Noonday Press, 56-93, 1971.
- 20) Shereshefsky, P. M. & Yarrow, L. J.: Psychological Aspects of a First Pregnancy and Early Postnatal Adaptation, New York : Raven Press, 67-102, 1973.
- 21) Sherwen, L. N.: Psychosocial Dimensions of the Pregnant Family, New

- York : Springer, 85-108, 1987.
- 22) Byrne, M. L. et al. : Key Concepts for the Study and Practice of Nursing (2nd ed.), 1978, 小島操子他訳, 看護の研究・実践のための基本概念, 180-184, 医学書院, 1984.
- 23) 梶田勲一: 自己概念の発達心理学, 27-28, 金子書房, 1989.
- 24) Watson, J. : Nursing: Human Science and Human Care A Theory of Nursing. 1988, 稲岡文昭・稲岡光子訳, ワトソン看護論 人間科学とヒューマンケア, 医学書院, 1992.
- 25) Montgomery, C. L.: Healing Through Communication, The Practice of Caring, 1993, 神群博・濱畑章子訳, ケアリングの理論と実践 コミュニケーションによる癒し, 医学書院, 1995.